もなっているくらいだから是非見たいと思っていた。ところが今の季節では早朝でないと見られないので，なるべく南に移動した時と考えて最南端のインバーカーギル市の宿に泊った日の翌朝4時に目ざましい時計で起き，東の空のそれとおぼしきあたりに十字星を発見，何のことはなく既に空高く昇っており，やや横たおしの姿勢だがそのとなりのケンタウルス座のα，β星と共にさんぜんとまたたいている。それよりなお異様であり圧巻なのは，オリオン座が北の空に完全にさかさまになって（当前だが）かかり，三つ星をその方向にのばした先に大犬のシリウスを経て南十字星がましますということもわかった。地球のまるさを観念でなく実感として味わう思いがして，しばし寒さも忘れて戸外に立ちつくした。（ニュージーランド，オークランドにて）　11月23日

西ドイツの女子学生

式　　正　英

ミュンヘンでの私の生活を豊かにした原因の一つは，学生達と付き合う機会を持てたことである。大学では私の研究テーマと希望に従って，教官達がフィールドを代る代る案内してくれたので，随分と啓発されることが多かった。ゼミや講義にも参加を許されることがあり，私が紹介されると学生達は机を左のこぶしで一せいに叩いてみせた。拍手ではないこの動作に初め何事かと思ったが，これが歓迎の意志表示だと知って安心した。どの講義室でも女子学生は4分の1位の数だった様に思う。教官のスケジュールとは別に，この学生達が実に能く面倒を見てくれたのである。

ルイーゼは地理の3年生，朗らかで世話好きで，とても好く気の付く娘である。彼女は私のペンジオンから歩いて5分位の所にあるテング通りに面するアパートの5階に，ボーイフレンドのウーリッヒと住んでいた。ウーリッヒも地理2年の学生で，学力の優れた好青年で教師志望である。階段をあがりつめた最上階の彼等の住居は，大きな部屋が3つも4つもあって一家庭が住まうのに充分である。キチン，浴室，ロビーは共用だが，個室は夫々別けている。日本では余り考えられない生活様式だが，結構うまく暮している様に思われた。ウーリッヒは彼女の亡くなった父親はマックスプランク研究所に勤めていた物理学者であり，彼女を尊敬しているので結婚したいともらしていたが，ルイーゼは当分結婚する気はないと云っていた。

学生食堂（メンザ）はテー・ハー（工科大学）に所属しているのが，ルイーゼン通りの地理教室

からは鼻の先にあり，大学関係者は自由に出入りできるので，よく利用させてもらった。安価で栄養豊富な昼食にありつくには恰好であった。初めはセルフサービスの一般学生向きとサービス付きの上級食堂に分かれていたが，滞在中の後半には，全部がセルフ・サービスへと変化した。ウーリッヒとルイーゼの案内で，ドナウ川北岸のシュワービッシェ・アルプにドライヴした時，昼食はレーゲンスブルグ大学のメンザで摂った。この大学は市街地に旧キャンパスがあるが，現在，新しいキャンパスをその南部に建設中である。超モダンな講義棟など目をみはる程の立派な施設で，メンザの内容も見事であった。そして何人ものルイーゼの知合いの学生に会ったが，セメスター毎に転々とできる制度のため，学生間の交際範囲はきわめて広く融通がきく様である。大学制度とはコミュニケーションの場とも云えると思うので，ひきくらべてみて羨しいことであった。

ルイーゼの都合の付かない時は代理にレナーテがフォルクスワーゲンを調達して来て案内してくれた。レナーテはカーラやドリスを誘い，皆でオリンピック・トルムに登ったりしてから，もっともババリア風だというビアホールで乾杯したりして，愉快な休日を過ごした。私を含めて皆で割り勘だったことも，楽しい思い出の原因となっている。　（１９７３年１１月）

東京のスカイライン

正　井　泰　夫

去年（１９７２年）の６月に，現在の文教育学部本館が完成してからは，研究室の窓外にすばらしい東京のスカイラインが展開している。もっとも，スカイラインといっても自動車の名前ではなく，都市景観がつくっている地平線のシルエットのことであるが。

第２次大戦が終って間もない頃は，この大塚あたりの高台から都心の方を望むと，議事堂ばかりが圧倒的な高さで立っていたことを思い出す。当時，地上からの高さが６４ｍに達する議事堂は，日本最高の建物としてよく知られており，政治が中心であった時代の象徴的な景観としての名残りをよく示していたものである。

ところが，東京タワーに象徴されるような高い鉄塔がいくつも東京のスカイラインをにぎわすようになり，議事堂の圧観は急速におとろえていった。とはいっても，れっきとした建物としては議事堂の雄姿は他を圧していたのである。